

昭和
四十五年年

一七
月二十三
日

第
三
種
郵
便
物
(每月
一回
十五日發行)

(通第二四八号)

慈光

第二十二卷 第一号

次 目

信後雜感	池山栄吉	(2)
一道会の記	柳原徳草	(9)
心のひかり身のひかり	木本達縁	(16)
仏智の不思議	花田正夫	(19)

歳旦におもう

総選挙も歳末多端のうちに型のようになり、いよいよ安保の年、沖縄の年、七〇年を迎えたが、日本丸の行く手には波浪がさかまいており、国内の紛争もはげしく叫ばれております。

この頃、信友とも語り合うことですが、日本に国難がせまた時、中古以来、いつも聖徳太子を追慕し、太子の十七憲法の大精神をよるべしとしてきました。ところが現今の混乱期に、大人は自信を喪失し、青年は人間不在の谷間にあって暗中摸索して激發している時に、親鸞聖人のものが出版されると、二十代から四十年代の人々によつてすぐ品切れとなつていると聞き驚いております。

さて私自身の記憶では、大正の中頃、第一次世界戦争で日本は漁夫の利を占め、船成金、鉄成金などが続出しましたが、ほどなく経済の大変動で、米騒動等々の事件がおこり、加えて関東の大震災もあって、人々は不安と焦燥にかけられた頃、倉田百三氏の出家とその弟子をはじめ人間親鸞等の書物が巷間にあふれ、聖人を渴仰する者が非常に沢山ありました。が、今回はその繰り返しのようであります。

実は、聖徳太子と親鸞聖人は不思議な徳を持たれた方で

信後雑感

さればただ一つなり

「一人居て喜ばば二人と思うべし、二人居て喜ばば三人と思うべし、その一人は親鸞なり」。私達は聖人とともども喜ばして頂けるばかりでない。その喜びの湧いて出る源信心そのものに就いて、聖人のそれと私達のそれと、すこしのかわりもないのを確信することが出来る。「源空が信心も如来よりたまわりたる信心なり。善信房の信心も如来よりたまわらせたまいたる信心なりさればただ一つなり。別の信心にておわしまさんひとは、源空がまいらんずる淨土へは、よもまいらせたまいまらわじ」。何ときびくした文句ではないか。他力信心の一大特徴はここだ。

「大願清浄の報土（ほうど）には品位階次（かいじ）を云わず。一念須臾（しゆゆ）の頃（あいだ）に、速疾に無上正真道（むじょうしようしんどう）を超証す」。私達はその智愚善惡を超えた一味平等の待遇に、一面恐縮に堪えないと同時に、他面言いしらぬ満足を感じずにはいられない

い。

心絃諧調

「哀れなる哉（かな）恩顔は寂滅のけぶりに化したまうといえども、真影（しんえい）を眼前にとどめたまう。悲しいかな徳音は無常の風にへだたるといえども実語を耳のそここにのこす」七百年の星霜をへだてながら、親鸞法然両聖人と一坐して、心絃（しんげん）の諧調を感じることの出来るのは一に如來からたまわった同じ信心の御蔭だ。

「先に生（しよう）ぜんものは後を導き、後に生ぜんものは先を訪（とぶら）い」相たずさえて同じ光を仰ぎ、同じ泉に酌（く）み、同じ蔭にいこい、同じ道を辿る。その唯一の相詞（あいことば）は同じ念佛のほかにない。

恋いしくば南無阿弥陀仏をとなうべし

われも六字のうちにこそすめ

いわば世の久遠の親、父であります。太子は内外の困難のせまる秋、女帝推古の御代に攝政の位につかれ、大暗黒裡に先づ御自ら仏智の開眼を得られ、大活動の最中に疫病で急逝せられましたが、そこに大難闘に立つて絶後に蘇る大道のあることをあかせられました。聖人は鎌倉時代の初期、源平の戦いといい、天災地変といい、大動乱の世にあって、しかも御自身仏道を求めて二十年の修行も空しく地獄は一定すみかとの、よろぞそらごとよわごとまことあることなき身に、ただ念佛のまこと大慈大願のましますことに驚喜されました。そしてその道は老少善悪貴賤智愚をへだてない、一切群生と同座せられて万人と共に慈光を仰がれる道であります。この聖人こそは現代人のもつあらゆる悩みをすべて理解して下さる方であり、人々をやすらぐべき心の故郷に帰らせて下さる方であります。歳旦、太子と聖人の洪恩を仰ぎつつ、称名裡に慈光を送らせて頂きます。

（花田記）

俱会一処

みあそぶおもかげさえも偶ばれよう。

安樂仏国にいたるには

無上宝珠の名号と

真実信心ひとつにて

無別道改（むべつどうこ）とときたまう

還相廻向

「今生夢のうちの契（ちぎり）をして、来世の悟の前の縁を結ばんとなり、われおくるなれば人にともなわれ、われさきだたば人を導かん」。亡き妻が不治の病にかかりて、それとしたとき、悲歎のなかからうれしさの身にもあまるを覚えたのはこの御文であつた。「楽しきはじめ思う毎、かなしき終堪えがたし」やがて幽明（ゆうめい）境をへだても、心と心とは永久に結びつけられて、淨土の対面を期することが出来たからであつた。

無別道故

「同一念仏して別の道なきが改に、遠く通ずるに四悔のみな兄弟なり」。世々生々の父母兄弟なる一切の有情は、一心帰命の一念に、同じ御親の愛子（まなご）として、永久かわらぬ精神（こころ）の上の兄弟となり、会者定離（えしゃじょうり）の相対界の理法を脱して、俱会一処（くえいっしょ）の絶対界にこの世ながらの志願を実成（じっじょう）することが出来る。現に親子たり、夫婦たり、兄弟たり、朋友たる人々の間に現当一世の結縁が確認された暁は独來独去の心淋しさもおのずからうすらいで、有漏うろ）の穢身（えしん）をそのままにともに淨土にす

すめ、且つは還相廻向の確信から、末通りたる淨土の大慈悲心を以て、一子のために尽くして下さつたのであつた。

往相廻向の大慈より

還相廻向の大悲をう

如來の廻向なかりせば

淨土の菩提はいかがせん

弟子一人ももたず

信仰はわがはからいで得られるものでない。むしろ如來他力のはからいでわがはからいがやんだところが信仰なのだ。わが力で獲られるものでない信仰は、またわが力で人に与えられるものでない。それだから真に獲信の体験のある人には、わが感化で人に念佛をもうさせようなどという考の起るはずがない。

聖人が「親鸞は弟子一人ももたずそうろう」とか「如來の教法を十分にとききかしむるときはただ如來の御代官をもうしつるばかりなり。さらに親鸞めずらしき法をもひろめず、如來の教法をわれも信じひともおしえきかしむるばかりなり。そのほかはなにおしえて弟子と云わんぞ」と仰しゃったのは、ほこりかにきこえるのをきらつてことさら卑謙（ひけん）な云いまわしをされたのではない。眞実内心の確信をそのままあけられたに過ぎない。

「この上は念佛をとりて信じたてまつらんとも、またすてんとも面々の御はからいなり」とあるのは、一寸見ると、「自分はもう云うだけのことは云つてしまつた。この上はどうしようと諸君の勝手だ、自分のしつたことじやない」といったような頗る冷淡な云い方ときこえるが、これもその実、信仰はひとえに如來の御催によるという確信から出でてくる坦懐な態度に外ならない。平素信者の間に立ち交じわって、御同門御同行と呼ばれたのも、やはり同じ思想の流露（あらわれ）と受取れる。

他力の信心うるひとを

うやまいおおきによろこべば

すなわちわが親友ぞと

教主世尊はほめたまう

一人一人のしのぎ

「如來の教法は総じて流通物（るづうもつ）」だが、信仰は、「一人／＼のしのぎ」だ。念佛は自分のすぐわれたあらがたさに、内の思いが口に出て声となつたもの。それ以外に何かの意味が寓されていたら、その念佛は怪しいものだ。「親鸞は父母孝養のためとて、一遍にても念佛もうしあることいまだそうちわす」とあるのは、自然そうなるので、そうした考の起るのを斥けて、わざと念佛と没交渉た

「お前に御信心がいただけなれば、親子といつてもこの世だけのこと、あの世で一緒になることは出来ない。だから是非御信心をいただいて、御淨土にまいられるようしないではいけない。私は先に行つて待つているから、しかしどうしてもいただけなればまあそれでもよい。私が仏となつたら衆生済度に出て、よしお前がどこにどうしていようとも、一番にお前を救い取つてあげようから」。亡き母が私の子供の時分、よくこういわれたのが、未だに耳の底にのこっている。私はどれだけこの言葉にひきつけられたかわからない。まだ信仰がぐらついて、如來が隠見出没していた頃、大分信的傾向から遠のいた矢先、この言葉をおもい出しては、にわかに後戻りをしないではいらなかつた。

今更おもえは亡き母は、如來の御使として私に信仰をす

らしめるという次第ではないのだ。

これにつけて考へられるのは、私が母の存生中、歎異鈔を読むたびに、いつも母を側に呼びながら、きょうはひとつ母のために読んできかしてあげようと思つたことの一編もなかつたのは、孝行心のない私のことだから、そうあつても不思議はないかも知れないが、それにしても余り変だと、われながら不審に堪えないことであつたが、ひょつとしたら、前と同じ理由に、胚胎（はいたい）していたのではないか。

追善のための念仏がありえないとともに、同様の理由で現世の利益を祈る意味の念仏もまたありえない。追善や祈祷の意味が念仏の中に打込まれるのは、まだ本当の信心がいただけいない徵候（しるし）だ。

わらといね

「まめやかに淨土をもとめ、往生をねがわんひとは、この信をもて、現世のいのりとはおもうべからず。ただひとつじに出離生死のために念仏を行すれば、はからざるに今生の祈禱ともなるなり。これによりて薦幹喻經（こうかんゆきよう）といえる経の中に、信心をもて菩提をもとむれば、現世の悉地（しつち）も成就すべきことをいうとして、ひとつたとえをとけることあり。たとえばひとあり

煩惱にまなこさえられて
攝取の光明みされども
大悲ものうきことなくて、
つねにわが身をてらすなり

悲哉愚禿鸞

「悲しいかな愚禿鸞、愛欲の広海に沈没し名利の大山に迷惑して、定聚（じょうじゅ）の数にいることを喜ばず、真証の証に近づくことを快（たのし）ます。恥すべく傷むべし」。聖人は私共の云わずにいられないことを、前以て云つておいて下さる。「さればかたじけなくもわが御身にひきかけて、われらがみの罪惡のふかきほどをも知らず如來の御恩のたかきことをしらずしてまよえるをおもいしらせんがためにそらういけり」。聖人は御感じのままを述べさせられても、それがそのまま私達への御さとしきこえ。しかも一一私達と同じ立場に立たせれられて仰しゃるのだから、たまらなくありがたく、また云いようなく頼母（たのも）しく感じられる。

親鸞もこの不審ありつるに

同様のお感じを唯円坊の問い合わせて述べられたのが、

「大悲の願船に乗じて、光明の広海に浮かびぬれば、至徳（しとく）の風静に、衆禍（しゆうか）の波転す。即ち無明の闇を破して速に無量光明土に到り、大般涅槃（だいはつねはん）を証し、普賢（ふげん）の徳に遵（したがう）。亡き妻が、娑婆（しゃば）の終を前にみて、大悲の矜哀に生きた時、至徳の風静に、衆禍の波転すということ、を、泌々味わせて頂いて、光明の広海に浮かびぬる身の仕合を深く懐んだことであつたが、これも一時かれも一時、無明長夜の闇は無碍の光明に晴れながらも、煩惱の黒雲はまだ信心の天を覆うて、法性（ほっしょう）の覚月（かくげつ）のあらわれるときく涅槃の境にはあこがれもせず、曠劫流転の苦惱の旧里にばかり恋々としている。これが私達の平生だ。

歎異鈔第九章で、これこそ實に信後生活の基調として、ことに拝戴すべく、希有最勝（けうさいしよう）の華文（けもん）として、最も誇るべきものの一つだ。
「念仏はもうしますものの、それにつれてのよろこびの情は微温的（いいかげん）なものでございまして、逆も踊躍歡喜などという飛び立つほどのうれしさを感じませんし、また遠く御淨土へまいりたい、という意向（かんがえ）も一向ございませんのはどういうものでございましょう」と唯圓房のおたずねしたところは、そのまま私達の御きき見て見たいところだが、聖人がそれに対して「それは親鸞（わたし）にも合点の行かなかったところであつたが、唯圓房、そなたにも同じおもいであるな」と仰しゃったのは、何たるさばけた同應（どうおう）の態度だろう。飽くまで見捨てぬ如來の慈悲を、無意識的に体現されたものと頂ける。「しかしそく／＼案（かんが）えて見れば、天に踊り、手の舞い足の踏むところもしらないほどに、よろこぶべき筈であることを、よろこべないので、いよいよ以て攝取（おたすけ）にあずかることは間違いないと思うたがよい」とは、意外も意外、敗軍の將が軍法会議にまわされるものと覺悟を極めていたのに、金鷄勲章功一級を賜つたよう、これは間違いでないかと、わが耳を疑いたい位の沙汰としか思わない。

衆禍 波 転

「たねをまきていねをもとめん。またくわらをのぞまざれども、いねできぬれば、わらおのすからうるがごとしといえり。いねをうるものははからずわらをうることく、後世をねがえばかならず現世のぞみかならなり。わらをうるものはいねをえざるがごとくに、現世の福報をいのるものは、かならず後世の善果を得ずとなり。経年のぶるところかくのことし」（持名鈔）

それになおづけて「一体よろこぶべき筈の情を抑えて

よろこばせないのは、自分に煩惱（まどい）がつきまとつてゐるせいである」といかにも成程と点頭（うなづ）かれる断案をお下しになつて、さてまた、「ところが阿弥陀仏におかれられては、このことを前以て御見抜きになつていらざれ」との仰せに、ハッとある暗示を与えたような気持になつたところへ

「私達を指して、煩惱にかけては何一つ不足なく具（そな）わつてゐる凡愚者（おろかもの）とおせられたことであるから、大慈大悲の攝取（おたすけ）の本願（おちかい）はこうした私共の為であつたのだということが会得されて、ますます頼もしくおもわれるのである」と、かゆいところに手がとどくと云おうか、隅から隅までゆきわたつたおさとしに、恰も心地のわるい砂利の上から、ふうわりした羽根蒲団の上に移されたような「何とも云えない渠々とした気分になつて、難思法海（なんしほっかい）のどん底まで徹到せしめられずにいられない。

力なくして終わるとき

私達の日ぐらしは、畢竟（ひつきょう）この問題を事実の上に反覆してゆくのだ。心が弘誓の仏地に樹（た）てられたありがたさ、念（おもい）は難思の法海に流れてゆく苦惱の有情をすてずして廻向を首としたまいて大悲心をば成就せり

力ある時にきて

人間鬼々（そう／＼）として衆務をいとなみ
年命の日夜に去ることを覚えず
燈（ともしび）の風中に滅する期しがたきが如し
忙々（ぼう／＼）たる六道定趣（じょうしゅ）なし
未だ解脱して苦海を出すを得ず
云何（いかんが）安然として驚懼せざらんや
各強く健（すこやか）にして力ある時に聞きて
自策自励（じさくじれい）して常住を求めよ
私の貧弱な信的実験を、臆面（おくめん）もなくさらけだして、世のものわらいとなるのも恥じないのは、まだ他力の信に徹到しない人々に、強く健にして力ある時にきて、力なくして終わるときの用意がしてもらいたさに、参考の一端にもとおもう婆心に過ぎないのだ。
灯（ともしび）の用意かしこしあの暮

心ある人は貧者の一燈ともゆるしてくれよう。

「絶対他力と体験より」

く。

いそぎ淨土へまいりたき心のないのもおなじ訳で、煩惱に後髪をひかれても、婆婆にとどまる縁がつきて、力なくして終わるときは必定（ひつじょう）かの土（ど）にまいらせていただけるので、いそいで行きたい心のないものを、ことにあわれとみそなわされるのだから、大悲の大願はいよ／＼たのもしく、攝取（おたすけ）は間違いないと受け取られるのだ。

さて最後に「踊躍歡喜の心もあり、いそぎ淨土へまいりたくそうちわんには、煩惱のなきやらんとあやしくそうちらいなまし」と仰しやつたのは、隔心（へだて）のやまない私達に逃げようにも逃げられないように、垣を繞らし、袖を控えられたかたちで、いかにしぶとい私達でも攝取不捨の周到さに、ただ茫然としてあきれずにはいられなくななる。

五浊惡世の有情の

選択本願信ずれば

不可称不可説不可思議の功徳は行者の身にみてり

如來の作願をたずぬれば

雲の峰

疲れたる旅人の

あおぎみる大空に
さまざまの姿して
わきあがる雲の峰
わきあがりやがてまた
くずれ行く雲の峰
あわれそのさだめなき
まどわしの姿かな
わがたどる運命
はてしなき旅の空
われはまた日毎見る
たのみなき雲の峰

（信を行く旅人より）

一 道 会 の 記

(一)

榊 原 德 草

われらの師「好き人」池山栄吉先生の追憶会である「一道会」——一道会の「一道」とは先生の号で、御生前、自ら「一道」と号しておられたその先生の号を頂いて一道会と称しているのであるが、これも拝察するに歎異鈔第七章の「念佛者は無碍の一道なり」のあの一道を先生自らおとりになられたことと思われる。

先生はよく仰せられた、歎異鈔には十八の門が開かれていて、どの門からでも入れるが、「親鸞におきては、ただ念佛して」の、あの第二章を正門とすれば「よろこばぬにて」の第九章は裏門である。

先ず、第二章の正門から、チャア私もと、「親鸞におきては」とあるのを「池山におきては」とおきかえて、「好き人」とあるのを「親鸞聖人」とおきかえて、「好き人親鸞聖人の仰せを蒙つて」、「只念佛して……」「況んや悪人をや」を歎々と味わい、その他の各章を嘗身読していくうちに、ある時期に至ると第九章の唯円房の身と同じ心念佛とはこうなんだよ、と或は「麗容の聖人」と題されたり、「只念佛」と題されたり、「只念佛して」、「たのもしさ」と副題をつけてお話し下さったり、第九章においては「桧舞台に呼び上げられて」と題されて、「唯円房の影に陰れている榎原さん、保木さん、かくの如きのわれらがためなんですよ」と恰も聖人自ら我等の眼前に化現してお説き下さるの感を涙をもつて称名念佛拝聴したことなど、一道会の「一道」と「先生」と「我等」との深いつながりを歎々と思い出すことである。

然し又、先生は或るとき、「そのとき聖人はフト姿を消される」と仰言つたことがあった、又「前向きの聖人」、「後向きの聖人」と仰言つたこともあつた。

憶うに先生／＼と、先生ならでは夜も屋もくらせぬ我等に、先生は姿を消されて、我等を直接阿弥陀仏の面前に立たしめられるのであつた。「念佛を軽々と扱う」とも「念佛をわがものにする」とも、一見して恐ろしいような御言葉もあつた。ただ尊く恐れ多く念佛と吾れとに一線を劃して隔（へだ）ててゐるような——つまり煩惱具足の凡夫といふものは何でもかんでも真すぐり歩けない、左に寄つたり右に傾いたり我執が去れば又次ぎは法執で、何かを握りどこかを把んでいないと生きて行けぬ我等に細心の慈愛をもつて訓（おじ）えて下さったことであつた。どうぞし

境に入つてくる、そこで聖人から、「よろこばぬにて、いよ／＼徃生は一定と思ひ給うべきなり、しかるに仏かねてしろしめして、煩惱具足の凡夫と仰せられたことなれば、他力の悲願はかくの如きの我等がためなりけり、と知られて、いよいよたのもしくおぼゆるなり」。この「よろこばぬにて」の裏門から、ひょいと門外に出てしまうのかと思つた身がここで、「いよいよたのもしく」確かりと「只念佛して」の念佛の坐りがつく、と仰言つたことが耳の底に残る。これは度々仰言つたことでもあるが、先生が第七章の「念佛者は無碍の一道なり云々」からとられて、御自らも一道と号せられたことは、第二章の正門と第九章の裏門と表裏一体して「只念佛して——たのもしさ」の内容を積極的に正面切って表現した第七章の「念佛者は無碍の一道そのものである」という金剛座の坐りを自らの号とされたものと拝されるのであり、この無碍の一道そのものの先生が、我々のようなあつちで転び此方でつまづく者に、お

て、お念佛一つ、ただそれだけで一切かたずく、そこを指示されそこに念佛（こ）らしてお話し下さった数々が憶い起こされてくるのである。

この先師御徃生の後、星霜幾たび重ね重ねて今年は早くも三十二回を迎えた一道会である。あの粉雪の降る日の御葬送の終つたとき、みんな黙々として頂垂れた面持ちで數人かたまって歩いた、どこかのうどん屋で寒さと孤独感とを織り交ぜた愁情を、熱いうどんをする／＼音たててそれでごまかして、だまつて何も云わずに喰べた、あの日はつい昨日のように思われる。毎年一道会を催おして先師の恩徳を偲び慕い生ける如き先生のあの念佛を聞くのであつた。始めの頃は数人であった。或る年は私の家の者達の方が多いときもあつた、子供等に歎異鈔を一章つつ拝読させたこともあつた。

年を重ねると共に一道会は広く深く大きくなつた、同時に面接の親鸞会の青年も頭髪に霜を、眉毛に白きを見る老輩となり、或は戦死した先輩、病没の友、生き永らえていても病む者、遠く離れて会し得ぬ者、来会の返事を頂いていたが俄に用事があつて不参と電話する者、昔のあの頃を憶えは面授の我等は数少い一道会であるが、先生がよく「念佛は自動作用する」と仰言つたが、今年の会する人々約六十人程であつたが、その大半は初顔の方々が占めてお

られる、どこの誰とも知らない方々が客殿一杯になつた。

あとで判つたのだが遙々九州長崎から馳せ参じて下さつた方もあつた。東京から四国九州まで各地からこの一道会のために集つて下さつたのであつた。

来年は三十三回忌に当たるのである。然も私自身を憶りてみても老と病とで来年を期することは恐ろしい気がしてならない、花田先生も痼疾老弱となられている。花田先生は一期一會と此頃よく云われる。私は此頃一寸先は闇と云ふ所思うようになつた、これは死が怖ろしいから出て来るのであつた。浅間しいものである。

先師の著「絶対他力と体験」を再版したのも、来年を期し難い思いからあつた。どうか有縁の方々にこの一冊をお勧め下さつて一人でも多く念仏の御縁の弘まるようお願ひ致す次第であります。

十月二十六日、例年のように十月の最終日曜日、午後一時から開会、阿弥陀經一卷を誦し、歎異鈔を十章まで拝読する。「さいわいに有縁の知識に依らずんば……」で胸がつまり涙がこみあげて声が出ない。今年こそは時間を長引かせぬように早く拝読せねばと思って坐るのだが、ここにくると涙と念仏でとだえてしまう。唯円大徳が仰言る通りである、有縁の知識「好き人」に遭えなかつたら、どうして「ただ念佛して」の一句が信証されよう。

いたりして、時の移るのも忘れている時に、相変らず先生は『ああそうですか』とか『なるほどね』とかの受け言葉をもらしては、自らお念佛せられるかたわら、私達を同行として同じ大悲の下に手を取り合う仲間のような御物腰の中に、話しかけられるような、同感と共に頑かち合うような態度で仰言られたお言葉、それがいつもながらのあの『ただ念佛してですね』の一旬であつた。

私は時を忘れて、再びすることを予期しなかつたこの、只今無事で帰りました、の挨拶のためのお邪魔を、小半日も過してしまつたのであつた。そして『只今は榊原さんが無事に帰られたお祝いとして、何もありませんが、どうぞおゆつくり……』のお言葉と共に『私もお相手するといいのですが、一寸腸を痛めているので』とあちらへ立つて行かれた姿は、いつものような、少し前脚のみ、帶を右前の腰に結んで垂らしていられる、あのお姿であった。それから祝膳の正賓として私は心から祝つて下さる先生の温い心のままに御馳走になつたのであつた。

私はこの日の先生を最後として先生の生けるお姿にはお目にかかることが出来なかつた。八年間、先生の温容に接し慈育せられた最後の生ける日のこのお姿は、忘れ得ぬ数々のことどもの中でも、特に私の胸に眼におそらく生涯を通じてやきつけられるお姿であろう。

漸く拝読も終つて、引続いて先師追憶の会に移つた。私は追憶の会を始めるに当つてその口切り役として何か述べねばならない。毎年私は「ではこれから始めさして頂きます」の一言で諸兄姉のお法味を伺い、それを筆記するという段取りにしていたが、一昨年頃からだつたか花田先生にあなたも、一寸何か言つたらどうか、といわれて、私は会の運び役だけでは池山先生に申説がない、そして又その役だけに安閑としているのは懈慢界に陥入つてゐる、卑下慢のところを一喝やられたなど、実は刀の峯打ちに遭つたようを感じたので、それからは私も一緒にお仲間に入らねばならないと思うよくなつて、今年は昨晚から宿泊して下さった松本先生と話合いながら、先師一周忌に松本先生によつて編輯された追憶録「呼子島」の中の私のものの一節を拝読して先師を偲ぼうと思つてゐた。それを次に拝読したままを書き、それにつけて加えて思い出の一つ二つを語したので書きおきたいと思う。

「『ただ念佛してですね』

支那事変に出征して不思議にいのち永らえて帰還した私が、梶井さんと岸田先輩と三人で先生をお訪ねした時のことを——『ただ念佛して』以外に理屈がすこしでもあっては駄目だ——と了解されたことである

右が、先生の追憶録「呼子島」の中に私が書いた冒頭の一節であるが、今年は、一道会が近づくにつれて、心が先生に集中されてくると、何かしていてもフトかっての目の先生の言葉が浮かび出てくる。その中で、今年はどうしたことかわからぬが、いつかの御講演のとき、それも何のお話から出てきたのか、その前後の連絡は思い出せないが

「犬も歩けば棒にあたる」の一句子であつた。何かしらんが今年はこの犬も歩けば棒にあたるの一句子がピカリと浮かんでくる。その時の先生の講壇のお姿も見えてくる。演壇の上を横の方へおよく、ような格好をして「犬も歩けば棒にあたる」——そう言われたあのお姿とこの一句子——私という一匹の野良犬が多生曠劫の間、目的もなく、あてどもなく、ただ騒々乎としてセカセカと業運のままにあえぎつづけてその終るを知らない、その犬が思いがけなく、投げかけられた南無阿弥陀仏の棒にあたつたのである。弥陀の誓願不思議に『ただ念佛して』の棒にあたつて仰天したのである——多分先生は、お念佛に遭う、その出会い方をたとえて、わがはかるべきことがらでない、如來にはか

らわれまいとする端的を仰言つたのだと思う。それが眉雪の老爺となつた今、三十二回忌の一一道会の催おされるにつけ、どうしたことか想い出されてきたのであつた。

こんな懐しい、光源のような先生の声が聞こえてきたことであつた。「一寸さきは闇」の私の愚痴の中へ、先生の端的な一句子が、新しく姿を変えた「たた念佛して」として浮かんできたのである。

こんなことをつけ加えて、私は会の糸口をひき出して、先生の御長男である寿夫様にお話を願いした、その大要は次のようである。

今日は室内も子供等も一緒に参らせて頂きました。昨年の一道会のときは身体が弱っていて来年はどうかとあやぶんでいましたが、幸いに今年は身体の調子がよい、で皆で参會させていただけたので本当に喜んでおります。

一道会というものは、父と直接結ばれた御縁の方々が集つて、父の想出を語り合うとでも言いますか、そういうところにこの会の意味があります。父と直接あう機会を持った方々、その頃の学生、青年で二十歳としても今は五十二歳、まあそこから大抵五六十歳、段々その数は減つて参ります。

しかし私はこうやって出て参つて嬉しく思いますのは、

が居る、父は皆と一緒にその人の仰せを聞く、その立場にあつたのです。自分が説く立場に父は居らなかつたのです。その場に来られる人のおたずねを機縁として、一人居てよろこばは二人と思うべし、二人居てよろこばは三人と思うべし、その一人は親鸞なり、あの通り、ともに親鸞聖人、阿弥陀仏、法然上人が常に横に居たのです。とにかく好き人を常に横にもつていたのが父でありました。つまり自分の歌を聞かすじやなかつた、相共に観賞する立場にあつた。黙つてこの絵を御覽、といつているのが父の立場でありました、そういう人です。

父は青年が好きで、青年がくると、とてもよろこんだ。そして青年は色々話す、ことに具体的な悩みをもつてきて父にぶちつける人があった。私などその時分、あんなに訴えているのに父はなぜ、さつき榎原さんもいわれたようにウンとか、そうですか、南無阿弥陀仏、でそれに答えようとしない、結局父は何を言つて居るかを聞いて、歎異鈔を読んで御覽、これが結論であったんです。

父は青年の内に自分を見、自分の内に青年を見る、そう見しき得なかつた、その結論は、まあ歎異鈔を読んでごらんという。父は青年が帰つて行く姿をみおくつて、アーティーと、大きな溜息をついている、そういう父の姿を二三回みたこ

その範疇にはいらない若い人々が次ぎから次ぎへと御縁に結ばれて来られる。人間の世の中といふものは結局機縁で結ばれていく、よいことも悪いことも結ばれている。結局機縁によつて何かを求めて若い方が集つていらっしゃる。尊いことと存ります。

そうして私こそ長男でありながら、この一道会にあわせていただいたのは七年この方でおはすかしい次第であります。それまでは遠く離れていて参會できなかつたのであります。池山栄吉という一つの存在していいた生命と機縁を結ぶ、一道会が発足された当時、父の下に集つて下さつた青年の方々、花田さん、松本さん、榎原さんなど、その御心を感謝ありがとうございます。

当時の方々以外の、その後の方々に一言申し上げたいことがあります。その中には父を、色々引用して大いに語つてゐるよく話す人のようと思われる方もあると思うが、そうでない。父は無口の人であります。家に客がくる、その客と無口、極端に云えば、一時間でも黙つていた人。なぜか、それを考えてみる。

私などはそれでは坐が白ける、身うちの者がきてもそれでは坐が白ける。ところが父は平氣黙つてゐる。なぜか、父は一人でなかつた、たとえば相共に名画を観賞する立場にあつた。父と客との横にしょっちゅう一緒にいる第三者

とがあります。父は自分自身の中に青年の悩みを、何も言えない、その結果、お念佛が出る、そうして歎異鈔を読んでおくれ、という。そうしか出来なかつたんじゃないかと思うのです。

歎異鈔は、変な言い方ですが、妙な本で、私の一生でも二、三度歎異鈔ブームがあつた、最近またブームが起つてゐる。結局人生にグワとはいりこんでいるからだと思います。口はぱたたく云えないことだが、多くの法文を説く人々も沢山あるが、一人々々に、ネー君、と直接はなしかけてくれるものは、歎異鈔の外にないと思う。

「泣く泣く筆をそめてこれをしるす、名づけて歎異鈔といふ、外見あるべからず」

あなたが読んでくれればいいのですよと、著者にこの態度がある、あなたが読んでくれればいいんですよ、これで結論している、これが歎異鈔であります。

私が言うまでもないことですが、どうかこの一道会に来られる御縁の方々、一道会は歎異鈔に結ばれている会で、それが目的でないかと思うのです。

私も去る十月十日で満七十歳になり、吉来稀（こらいまれ）の方へはいりました。幸い病気もせずにきましたが、悔いの多い生涯、なすべきことも為し得ない生涯で申訳なく思ひます。そして父が居てくれたこと、何とありがたい

ことかと、しみじみ思い念仏が流れ出る。しかしこれは悟つた人だからではない、いつまでも苦しいから、念仏せざるを得ないのです。

或る友人が、真宗は悪人を救うという、そなれば、死刑はないはずだと。これは私の若い時だつたが、しかし

我々自身が死刑囚でいつ死ぬかわかりません。つまり自分の中へとり入れるということ、とり入れるということが

信仰生活の根本の態度で、自分と外の人々との対比ではなく

く、自分と阿弥陀様との世界の中に、何もかも取り入れてその中で考える。父が青年の中に自分を見出すように、死刑囚の中に自分を見出す、他人の中に自分を見出す、それが信が歎異鈔であり、阿弥陀仏のお慈悲であります、それが信仰生活であります。

まことに生意氣なことも申しましたが、何か御縁になれば池山栄吉という男は、歎異鈔以外になかった男であるとということを知つていただきたいと思うのであります。誠に失礼なことを申しました、おゆるしのほどを。

池山寿夫様、先師の御長男の御追憶を拝聴している間に私は、先師と同じ咳を時々されるのを聞く。毎年のことであるが、好きな人（先師）の仰せをそのまま蒙つているような気がする、懐かしさ、慕わしさがこみあげてきて、唯円

同 倘

筑紫野春草

あるものはとく退きぬ、あるものはいつとはなしに遠ざかりたり

まじぐらに己が信ずる道ゆくと、たゆらはずけり、わがどち等皆

先進のあとよりつけて行くのみのわが歩みなり言ふには足らず

いたづらに秀でし人を羨しむと言ふならねども、うら恥かしき

心のひかり身のひかり

木本達縁

を育てねばならぬ。

鳥は人の姿をみると、空高く逃げて行き、魚は人の足音をきくと底深く沈んで行くのは、みないのちがおいしいからである。一寸の虫にも五分の魂といわれているように、どんないきものでもいのちを惜しまぬものはない。小さい虫が身の危険を感じると死にまねをしたりするのを見ると、滑稽にさえ感じられる。

しかしこれらの生物はただ本能的に死をおそれ生をまるる感覚はあるけれども、もう一步進めて、生死というものを意識し、考えるだけの能力がないから、むやみに生きてむやみに死んでゆく。これらの生物は苦しみはあっても悩むことをしらぬのである。悩むことを知つてゐるのは人間だけである。猫や犬は、馬鹿といわれても腹も立たないし食うことにも、着ることにも、住むことにも悩みを持たないが、人間はまことに苦惱の有情（うじょう）である。しかしこの悩みを畠（はたけ）として菩提心（さとり）の種

房が矢張り聖人のお声を「耳の底に」とどまるところと言われたことを再びあらたに感懷深く味わうのである。先師にあい得てまたその御長男に同じ信海流出の声、お念仏大悲を重ねて聞く、私達は何とした幸せであろうと思う。（未完）

これに反して、悩みから逃げて、ただ享樂の方に眼をむけて、人生をこまかして鳥獸のような一生をすごす人もあり、また折角悩みを問題にしながらも、眞実の解決のひかりを得られないままに空しく苦海に沈んでゆく人もある。

大聖祇尊は、一切の衆生の悩みをわが悩みとされて、あらゆる苦しみに堪えて、その悩みを御自ら越えられて眞実のさとりを得られると共に、あらゆる人々をそこに導きいられて下さったのである。親鸞聖人は、幼にして父母に別れられて無常をわがこととして痛感して道を求め、煩惱熾盛（じょう）にして罪業深重の身に万策つきて、さとりの道に絶望せられると共に、叡山をくだり、よき人法然上人を吉水に訪づねて、南無阿弥陀仏のひろい天地を伝授せられ、大安心のよろこびを得られた。その他、印度・支那・日本に出られた高僧知識は、皆人間としての苦悩から出発して真剣に人生を生き抜いて、我々に高く法灯をかかげて下さったお方ばかりである。

今から十四五年前のことである。幼い頃病氣のためひとり歩きのできないお氣の毒なA子さん（今年四十四才）が、友人の背に負われて私の宿へ夜十一時頃たずねて来ました。A子さんの曰く

「先生、私はどうしてこんな不幸な姿に生れたのでしょうか。そのわけを教えて下さい」

と、せつせとお念仏の真心こめて作って下さった懐しい面影が今も目に見えるようになります。このお母さんが涙ながらに次のように話して下さいました。

「私は十二人の子供を生みましたが、次から次と八人まで死なしました。焼野の雉子（きぎす）、夜の鶴、またしても可愛いわが子を死なせては泣き、八回も涙の袖をしぼってきました。誠に何処まで深い業を背負った私であろうと、先がまっくらになる思いでした。

ところが九人目の子供にサダエというのがいましたが、この子の八ツの時、病氣になり種々と養生させた甲斐もなく、次第に経過が悪くなつて行きます。家中が暗い思いをしながら、それも出来ませんでした。

ところが或日、突然にも病床から南無阿弥陀仏へと声高々にお念仏がきこえました。私はハッと胸をさわがせながら、サダエの名をよびつ病床へ行きますと、サダエは平気でお念仏しているではありませんか。お前どうしたえながら、こう云いました。『お母さん私ね、もうし

ば

母さんのミツヨさんが、

「何この田舎世帯にておもてなしもできません、せめて手打うどんでもこしらえてしんせましょう」と、せつせとお念仏の真心こめて作って下さった懐しい面影が今も目に見えるようになります。このお母さんが涙ながらに次のように話して下さいました。

「私は十二人の子供を生みましたが、次から次と八人まで死なしました。焼野の雉子（きぎす）、夜の鶴、またしても可愛いわが子を死なせては泣き、八回も涙の袖をしぼってきました。誠に何処まで深い業を背負った私であろうと、先がまっくらになる思いでした。

ところが九人目の子供にサダエというのがいましたが、この子の八ツの時、病氣になり種々と養生させた甲斐もなく、次第に経過が悪くなつて行きます。家中が暗い思いをしながら、それも出来ませんでした。

ところが或日、突然にも病床から南無阿弥陀仏へと声高々にお念仏がきこえました。私はハッと胸をさわがせながら、サダエの名をよびつ病床へ行きますと、サダエは平気でお念仏しているではありませんか。お前どうしたえながら、こう云いました。『お母さん私ね、もうし

一言一句を素直にうけいれて、白紙に字を書くようにあざやかにうなずかれて、

「ありがとうございました。私は今まで、親を恨んできましたが、勿体ないことでございました。お聞かせにあずかつてみると不幸な私を生んだのは親ではなく私の業が私を生んだのですね」

何というすばらしいお領解のことばでしょう。その後の手紙に

「先生、私ほどの不幸者はまたとこの世にないと歎いていましたが、お聞かせにあずかつてからの心境は、世界一の幸福者になりました。私が人なみの健康な身であつたら、この世の欲にかかりはててお念仏の尊さも知らずにすごしてしまふでしょ……」

と、不自由な身と病弱の身体をもたれながらも、如來の慈悲にささえられてお念仏に生きておられます。

その二

これは、私が十九歳の頃、御開山さまの御苦勞の一端を行ずる覚悟で、深い修行笠をかぶり、草鞋で雪の中を出ていった時のことである。

広島県松永市の高須という所に藤原和一郎さんという家に一夜の宿を預いて、その村人と一緒にお念仏の喜びを語り合つた。昨年三月十七日に七十五歳で亡くなられた御

しばらくになりましたからみんなにあいたいから呼んでおくれ」と申します。私は胸つまる思いをしながら、あわててみんなに知らせ、みんなも驚いてかけ集り、枕元をかこみました。そうした中で、サダエの云つた言葉は、實にただひととは思えませんでした。『お母さん、お父さん、皆さん、私の病氣がたとい一時治つたとしても人間は必ず死なねばなりません。今死ぬか、後に死ぬか、たとい長生きしたとしても夢みたいものです。お父さんも死ぬ、お母さんも死ぬ、みんなも死にます。いくら長生きしてもお念仏の出ないようではつまらんです。お父さんお母さん、私が死んでも泣くんじゃないよ、私はしゃわせ者です。お念仏して送つて下さい』

と、何という不思議な子でしょう、わが子ながらあきれてしましました。又しても「泣かねばならぬ業の深い涙の中に、こんな不思議な子が生れたことは、よく／＼不憫な私をご濟度下さる如来様のお使いであつたのでしょうか」と、さめざめと涙の中に語られたお母さんのお念仏の姿が深い印象として私の胸にきざまれております。「弥陀の本願には老少善惡の人をえらばれず」であります。何という尊くもありがたいおさとしてありますか。

仏智の不思議

花田正夫

歎異鈔は、聖人口伝の真信と異なるものをあれみ悲しんで老大徳唯円が老いの目に涙をたたえて書き残された大切な書であるが、その異義のおこる病源は、序文にあるように「自見の覺悟」による、自見とは我見であり我執の見解である。この邪見を破ることは自分自身では不可能である、たとえばどんなに腕力の強い力士でも自分が坐っている坐布団を自分であげることが出来ず、刀は刀自身を切ることが出来ないと同様である。

釈尊御在世の時、バラモン僧の長爪梵士が訪ねてきて「自分はどんな主張をも否定することが出来る」と豪語すると、仏はたちどころに「すべてを否定し得る汝が、否定するということを肯定しているではないか」とその盲点を指摘され

「何故に、その汝自身をも否定せぬか」と、無我の智慧でねんごろに誠め導かれたのである。

のである。

しかもその仏智は、現実の相対差別の世界に自由自在にその働きがあらわれるるので、その有様はまた不可称、不可説、不可思議である。古歌にも

春ごとに花は咲くなり吉野山

木を割りて見よ花のありかを

とあるように、その妙用（みょうゆう、すぐれたはたらき）はあらゆる縁に応じてあきらかにあらわれながら、その本体は我等の相対智で知ることは出来ない、唯我々はその仏智の働きを身にうけて仰ぎ信ずるばかりである。

仏智の権化、象徴にまします大勢至菩薩は、煩惱に眼が障えられて、はてしない無明の大夜にさまよう我等をあわれみたもうて大燈炬として「智慧の念佛」をさすけて下さる。

○無碍光仏のみことには

未来の有情（うじょう）利せんとて

大勢至菩薩に

智慧の念佛さすけしむ

勢至念佛すすめしむ

信心のひとを撰取して

このように万人がそれに執（と）らえられ、そこに縛（しば）られて、はてしなく惑うより外ないのに、これを破り、縛りを断つには、般若（はんにや）の智慧、無我な仮智不思議の力によるよりほかはない。竜樹菩薩が大智度論（だいちどろん）の十八に、その仮智不思議を讃えた偈文に

若し人般若（仮智）を得れば、議論心みな滅す
譬えば日出する時、朝露の一時に消失することし

と、その不思議なはたらきを述べていられる。
さてこの仏陀の大覚の境界にひらけた仮智は、清淨無垢な絶対智であつて、我々の相対分別の煩惱に濁らされた智慧ではない。しかしこの絶対智は相対智に対するようなものではない、相対とか絶対とかをさらに超えたもので、我々の考える相対とか絶対を包み、それらに執らえられず、しかも到るところにみちわたつていて、尽十方無碍光とも、無辺光（むへんこう）とも、不可思議光とも云われる

浄土に帰入せしめけり

勢（註・大執至菩薩は法然聖人の御本地なり）

祖師聖人は廿九才の時、恩師法然聖人から

「ただ念佛して弥陀にたすけられまいらすべし」

とのお導きをうけられて、

「よき人の仰せをこうむりて信するほかに別の子細なきなり」

と、仮智の不思議の念佛をいただかれ、そこに「信心の智慧」が開花し、その信心の仮智見（ぶっちけん）からの聖人のお言葉が、直々に我々の心に働いて下され、やがて自見（じけん）の覺悟が破られることは、聖人の教の流れを汲む者にとってはまたとない幸せである。

唯円大徳はこの仮智そのもののあらわれとしての聖人の御物語りを幸にも耳の底にのこして下され、そのままを我々に伝えられるのである。親鸞聖人が、恩師法然聖人を仰がれて「姿を見れば法然聖人、言葉を聞けば弥陀の直説」と讚歎されたように、唯円大徳もまた祖聖のお言葉に仮智そのままを感じられたに違いない。

我等はこの御物語りをよすがとして、我身の真相を照らし出され、身にもつ罪障の重さに沈みきつて浮ぶ瀬のない身にそぞがれる仮心の御眞実にあわせて頂くことが出来る。

聖人の実語

まず歎異鈔の各条が流れ出る水源地ともいえる第一章を挙誦しよう。

「弥陀の誓願不思議にたすけられまいらせて往生をばとぐるなりと信じて云々」

と冒頭から仰言る。

さて我々が仏書を読むといたるところに不思議という言葉がある。某医師が、科学は不思議と思われたことを次々と不思議でなくするのに、仏書には不思議が到るところに繰りかえされるので抵抗を覚えると云つたことがある。さて不思議とは意想外のことであるが、それも現在不思議と思われていることが科学が進み、文化がひらけると当然となることも多いけれど、仏教で言う不思議とは、やがて不思議でなくなるというようなものではない。世間でよく科学が進めば宗教が無用になると言う人もあるが、これは仏智の絶対性を知らぬからである。

我々の思議は、自分の智識とか経験をもとにあれこれとはからうのであるが、その我々の外に求めて得た智識や経験が有限であり、我々自身が相対分別の領域を出られないから、般若の智慧、仏の絶対智は、不可称、不可説、不可思議である。人類の文化がどんなに進んでも万劫末代まで

も不可思議であり、また天才的智慧を持った人がいくら沢山集って衆智をあつめても及びもつかぬことである。そこには次元の相違があり、無限な境界のへだたりがある。またそれをどんな力で消そうとし、否定しようとしても、不可能である。譬えば雲霧がどんなに空を覆うても、月と日を消すことが出来ぬように、万古不易、如来常住にして変易することはない。

さて、この弥陀の誓願の不思議にたすけられまいらせて往生をばとぐるなりと信じて、とあるが、不思議を不思議と信することは、我等の能力、智慧才覚を超えたことである。

聖人は信巻に

「無始よりこのかた、すべてわれわれは無明煩惱によつてはてしない迷いの境界に沈み、多くの苦しみに縛られて、清らかな信楽なく、またもとよりまことの信楽がない。ここに無上の功德に遇いがたく、すぐれた信心が得がたい」

と述べて、信の極難さを指摘せられる。またこの不可能が可能化される唯一の道として聖人は、信巻に、

「無始よりこのかた迷いの海に常に沈み常に流転していれる凡愚（ほんぐ）も、仏力によれば容易に無上の仏果を成すことが出来るけれども、この仏智の不思議を信ず

発起せしめたまいけり

「念佛申さんと思いつたつこころのおこる時、すなわち摂取不捨の利益にあづけしめたまうなり」

釈迦弥陀二尊の善巧の大悲に催されて信心の花がひらけ、念佛ももうされるのであるが、その念佛がまだ口に出ない、申さんと思ひ立つ心のおこるとき、最早摂（おさ）め取つて二度とお見捨てになることのないめぐみにあづからせて下さると聖人が仰言る。

さてここの摂取不捨ということであるが、唯蓮坊が雲居寺の阿弥陀仏に、摂取不捨のことわりをお知らせ下さいと祈誓をせられた時、夢想の中に、阿弥陀仏があらわれて、しっかりと袖をとらえたもうて、どんなに逃げようとしても放されなかつた。唯蓮坊はそのことがあつて摂取不捨といふことは逃げる者をどこまでもとらえてはなされないと信することが出来たと伝えられる。

世の常の有様を見るのに、何かよいところとか、取柄があれば、それを目当に種々の手がさしのべられるが、一旦それが駄目となると古下駄のように捨てられるのが鉄則である。それは他人事ではなく自分自身がその類である。

大阪の船場の俚諺（りげん）に「倒れて泣いている者は道行く人が唾をはきかける。立ちあがろうとすると人々

被り

ることがまことにむずかしい。しかし我等の力では不可能であつても、仏が不思議な威力を加えて下され、また大悲をもととした広大無辺の仏智の御力によつて、獲がたい淨信も獲られ、虚偽と顛倒（てんとう）より外になじみに、くだけぬまこと恵まれる」と本願の不思議力を讃えられる。

仏法にあいながら、仏法を聞きながら、それが仏智の不思議の故に、我々は信ずることも、念ずることも出来ない、手も足も出ない凡愚の身に、そのことをかねてしろしめして、大悲倦むことなく、この相対差別の対立抗争の我等に、その不思議なはたらきが絶えず現れて、我々の力のどかない不可能事が、仏の加威力（かいりき）によつて可能化される。そのためには常時不斷の火と燃える弥陀仏の御苦勞がある。五劫思惟の願といい、兆載永劫（ちようさい、ようごう）の修行と釈尊がそれを讚仰せられ、諸仏もこれを証城（しょじょうじよ）されている。

ああ、誓願の不思議なるかな、仏智の不思議なるかな。往生の大事はこの威神力によつて成せられ、念佛申さんと思ひ立つこころもここに発起せしめられる。

釈迦弥陀は慈悲の父母

種々に善巧方便し

われらが無上の信心を

が手を借りしてくれ、走りだすとみんなが手を叩いて声援する」とあるが、この倒れて起き上る力もない者、誰からも唾棄せられる者を弥陀仏ばかりはおさめとて捨てたまわぬとは、何という不思議であろうか。こんなことは地上の何處にもあり得ないことである。唯蓮坊の不審もそういうことであったと思う。「摂取して捨てじ」と仰言る、そのことがうそとは決して思えぬけれど、しっかりとそれが信じられないのも、この世にあり得ないことがあるから、釈迦仏をはじめ七祖、聖人が異口同音にそう仰言つても仲々うなづけないのである。

この不審、この疑惑の雲霧が破られるには、このあり得べしと思われぬまことか、我々の思惑（おもわく）をこえて、たえず、現にあらわれて下さる事実にくりかえして直面させられること以外にない。阿弥陀経の後半に六方の数限りのない諸仏が証誠護念して下さるもの、信じ得ない我等を憐憫される姿である。たえず落ちてくる水滴がやがて堅い岩を穿つように、くりかえされる仮智の眞実にほだされて、疑うことの出来ぬ身となり、不思議を不思議と頂けるというものだ。白杵祖山老師は恵みをもつて恵みをよろこぶと云われた。親が絵本を買って子供に与えると、子供は喜んでうけるが、絵本の面白さを知る智慧をすでに親が与えていればこそ、子が喜ぶことが出来るのである。親のめ

ぐみによつて恵みをよろこぶように、仮智の不思議は仮智の不思議によつて信楽（しんぎょう）させて頂けるのである。

私の友人は少年の頃母を失つて人手にかかるつたので何時も相手の顔色ばかりうかがつて、きらわれはすまいか捨てられはしないかと苦にしていた。そうして青年の頃、歎異鈔を読み、摂取不捨の一語にふれ、仏の方からそう仰言つて下さる不思議に驚き、そこに久遠の親心を知らされ、それからずうつと、歎異鈔を身読し続けている。聖人は教行信証の総序に「誠なるかなや摂取不捨の真言」と自証（じしょ）されて、「聞思して遅慮（ちりよ）することなかれ」とお勧め下さつて。これ全く仮智の全現であり、このお誓あつてか我等凡愚が仏道において不退転のたのもしさを恵まれる。金剛堅固の信心もそこにおのずから定まる。

「弥陀の本願には老少喜惡の人をえらばれず、ただ信心を要とすとするべし」

この一句は、私自身が初めて歎異鈔を読んで驚きあきれ堅く閉ざされた心の扉をひらいていた金言である。それまでに聖書を読み神の聖愛をきき、その感得のためには自身も聖愛の実践者にならねばならぬ、子を持つて知る親の恩ということもあると、そこに理想をおいたけれど、

悲しい哉、私自身は親さえも火鉢あつかいしか出来ない、冬は有難がり夏は邪魔にするといいう始末で理想は幻影と消えた。ここにその道は閉ざされ、一灯園に入つて下坐行の真似事を試みたがみのつた稻の穂は頭を下げるが、愚者の私は頭が下がらない、そこにも厚い壁に障えられた。こうして宿なし犬が食を求めて塵箱をあさり歩くような生活を続けていた時、念佛の信者の伯父から歎異鈔を与えてくれた。はじめて読む仏書とて殆んどわからぬところばかりであつたが、この一句は強く私の心身をとらえた。

といふのも、自分の飽くことを知らぬ利己心、そして底抜けの愚鈍さに絶望している身に、善惡を苦にせず、智愚も氣にかけず、我に来れ、との不思議な仏語をきいたからである。よく／＼考へれば、この地上の何処を探しても、善惡の争い、老少の意見の相違、大きくは国際間の立から、小さくは家庭内のものまで、へだて心を根とする裁きの風が吹きすきんでる。また種々な教もあるが、一切衆生を平等に、一人子として慈懷におさめられる教は何處にも見出されない。聖人はこの広大無辯の仏の大慈大悲心を御自身にうけられて、そのおこころのままにお述べになつてゐる。

釈尊の御在世の晩年、父を獄死せしめたけれど、やがてその非を悔いて大煩悶におちた阿闍世王が、篤信（とくし

人の父の声をきき、仏弟子のギバ大臣のねんごろな勧めに導かれて、仏陀にまみえて「大王よ」「阿闍世大王よ」と仏から呼びかけられた時、自分の様な大罪人を大王とお呼び下さるとはと、「仏心平等にしてさらにへだてなきを知れり」と随喜している。おへだてなきまことなるかな、ここに人生に光が射すのである。

この地上の何処にもあり得べからざる心、おへだてなき御真実心こそ、仮智不思議のそのままのあらわれである。但し、この仮心を差別を無視した平等心であると、われらの分別心で聞くと、かたより易いのであるが、そうではない。仮智の働くところの差別にとらわれる我執のしこりをとかし、平等にかたよる我等の偏見を破つて、眞の平等心（ゆえに差別にあらわれ、その差別はそのまま平等心に支えられるという円融無碍（えんゆうむけ）の大信海に導き入れて下さるのである。

「そのゆえは、罪惡深重、煩惱熾盛の衆生をたすけんがための願にてまします。しかれば本願を信ぜんには他の善也要にあらず、惡をもおそるべからず、弥陀の本願をさまたぐほどの悪なきがゆえにと云々」

仏法で因果の道理を説かれる、善い因（たね）には善い果（み）を結び、悪い因には悪い果を結ぶ。地上一切の事

象はこの法則からもれるものはない、時としては事態のわからぬところがあつて、矛盾したように思われることも、やがて事態の全貌が知れると因縁果の理法はそこに厳然と知られる。

さてこの因果の鏡に照らされると、煩惱具足の身、罪業深重の身の自業自得の道理で、はてしのないまよいの境涯に沈みきつて、浮ぶ瀬のない、地獄一定の姿が知らされ、理想は崩れ、救いの光は消え去る。

西田幾多郎氏の寸心寸語に

「或事柄の進行はどうにも運命としか思われぬことがあらしかし其の源を考えて見ると遠き以前において、やはり自己の失策であることを発見する。運命責任を他に帰したと思えばなお心を平にすることができるが、自己の誤りから来ると思えば苦悶を感じねばならぬ。如何にこれを見すべきか」とある。

ところが聖人は、そのたすかりようのない罪業の身をたすけんがための本願ますと仰言る。我々の持つ相対的分別判断の智慧ではそうしたことがあるとは思われないのに、聖人は明らかにあると、身をもつてあかして下さる。それは全く超因果の境界からの救いの御手である。我々としては不思議なお力と申すほかはない。我等の罪業に縛られて手も足も出ないことを私はかねて知り抜かれて、

それ故にあわれみ、飽くまでも捨てられず、仏の不思議の御力によって、水を水にとかすように罪障を功德と転じて、往生成仏せしめて下さるぞとおしえられるのである。さてここで大思一番、聖人の仰せが眞実なのか、我々の考へが正しいのかと、これが大問題である。

かえりみれば、自分の力をたのみ、自分の考え方通りによかれ／＼と願いながら、何時も悪に負けて、我と我身を如ほんともすることが出来ず、次から次へと苦に沈んでいたずねになり

「ただ念佛して弥陀にたすけられまいらすべし」

と聞きとられたのである。その法然聖人もまた、十五才から四十三才まで叡山で一切経を五回も読破し、あらゆる行も実践せられたのであるが、「渡しに舟を失うが如く、闇に道に迷う如く」大疑團に縛着せられた。幸に善導大師の觀經疏（かんぎょうそ）によって、凡夫往生の道あるを知られ、その玄意は「選択（せんじやく）本願の念佛」にありと読みとつて念佛の信者となられたのである。

流れは遠く、弥陀仏の本願に源を発し、釈尊の開頭となり、善導、法然、親鸞と高祖聖人が伝々相承されての上での御勧めである。しかも異口同音に自力の頼み難きことと、仏願の真実にましますことを、わが御身に実証されての御言葉である。云い換えれば、聖人が我等の身になりきつた上での御導きであり、そのまま如来直々の御使いにまします。如何に疑心の深い我等も、その真実に打ち負かされて、微塵も疑う余地がなくなるのである。

広大無辺の如来の御本願一つがたのみであり、その光明に照破されても、今までダイヤモンドのように、立派な宝とし誇りとしていた自分のやつてきた善も、偽せのガラス玉とわかり、同時に、自分が悪い悪いとおそれおののいた悪業も仏力にとかされて、さまたげることも出来ない。實にたのもしい限りも知らされる。

このような広大無辺の仏の願力不思議を身にうけて、はじめて身にもつ業報に随順することも出来る。かえりみれば、因縁果の道理は自明のことと信じている積りでいたけれども、実はよい結果だけを好んで身にうけ、悪い結果は責任を他に荷して、逃げようと拒否していた、即ち本当に因果の道理を身にうけていなかつたことも知らされる。

更に分り易い例として、死の問題をあげれば、現に生きている限り、明日をも知らぬ生命であると誰しも知つてい

るが、本心には、まだ大丈夫、死ぬなどと思いもよらぬこととして心で拒否している。これでは、生あるが故に死あるいは、という自明の因果の道理を本当にわかっているとはいえない。これでは、何時までも生きたいという欲求で一切を判断しているだけで、危い限りである。ここに、名残り惜しく思えども娑婆の縁つきて、力なくしておわる身を、かねて煩惱興盛の身としろしめされて、それをことに憐んで下さる大悲しませば、そのいや／＼暗い死も、「死もまた我なり」と受取らして貰い、これでようやく因果の道理を身にうけはじめることが出来る。

あゝ仮智の不思議の妙用なるかな、無明闇黒の世界に光明をあたえ、自然の道をひらいて下さる不思議さ、たたえに言葉もない次第である。

一茶の句

明月の御覧の通りの屑家かな

あはら家のその身そのまま明けの春
目出度さもちう位なりおらが春

あとがき

謹んで年頭のおよろこび申上げます。また失礼ながら賀状を頂きます。したことを誌上でお礼申上げます。

福島政雄先生、白井成允先生は八旬になられましたがお丈夫でいらっしゃることはありがたいことであります。

歳旦をまずおとする念佛哉

との池山先生の句は、先生の御生涯を貫かれたものであります。この句が思い浮かぶと、お念佛の催促をこうります。

○ 池山先生の信後雜感は、「絶対他力と体験」の後篇から頂きました。信心の智慧の生活の上に光をもたらして下さる有様を、先生の御体験のままで述べていただけます。近角先生が、この書の序文に

「君が信仰の懺悔録である。実にこれ人生をもつて紙とし、血涙をもつて墨とし、骨肉をもつて筆として書かれたる活文字である……」と推奨せられました。

一道会の記は、榊原さんが、学校

を退かれて、淨住寺でのひたすら念佛の生活に帰られましたので、早く、記録を頂けました。

一時健康を心配されましたが、最近はお元気のようにお見うけし、嬉しく思いました。

毎月第二日曜の午後一時から、静坐と仏教講話の会を催され、「一つの会」と名づけられました。

有縁の方々は御参會下さいませ。

心のひかり、身のひかりの一文

は、大阪の繁華街、昔から生き馬の眼を抜くとまでいわれる中にあって、月々洋紙一枚に満腔の願いをこめて、有縁の人々に頒つていられるものから頂きました。現今、法事と葬儀と、兼業に忙殺されて、法を聞く場所のすくない仏教界にあって、夙夜に法耕に専念して下さるお姿に常々敬意を表しております。

○ 仏智不思議の一文は、聖人の御晩年、和讃等で、仏智の不思議、智慧の念佛、信心の智慧、智願等々と、仏智、即ち般若の智慧を隨所に讃仰して下さることに心をとどめ、年頭に一文を草しました、御高教をお願い申します。

紹介書

母性讚仰記 福島政雄著

定価五百円 送料七十円。
東京都新宿区早稲田町四十二

振替 東京一四七五八三
明文書房

○ 每月第一、二、三日曜、午後一時半。一道会例会。南区駆上町二ノ八八、市電新郊通り一丁目下車、東三筋入ル左入ル二軒目

○ 每月二十四日午前午后、教西寺法話会昭和区小桜町、市電御器所通下車、市バス北山町下車、東一丁

定価 半年 二百五十円 (送共)
一年 五百円 (送共)

編集 発行人 花田正夫
名古屋市南区駆上町二ノ八八
電話八二一局七〇三七番

印 刷 人 吉野穂志郎
愛知県西加茂郡三好町大字福谷
名古屋市南区駆上町二ノ八八
電話八二一局七〇三七番

振替口座 名古屋一〇四七〇番
郵便番号 四五七